



TITLE:

康熙前半におけるクヤラ・新満洲 佐領の移住

AUTHOR(S):

松浦, 茂

CITATION:

松浦, 茂. 康熙前半におけるクヤラ・新満洲佐領の移住. 東洋史研究
1990, 48(4): 710-740

ISSUE DATE:

1990-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154305>

RIGHT:

康熙前半におけるクヤラ・新滿洲佐領の移住

松 浦 茂

はじめに

第一章 バハイの寧古塔將軍就任とアムール川中流域水系の邊民組織

第二章 康熙九年のクヤラ佐領編成とその吉林移住

第三章 康熙十三年における新滿洲佐領の編成

第四章 新滿洲佐領の移住

むすびにかえて

はじめに

十七世紀後半の中國東北部において最も重大な政治問題は、對ロシア政策であったことは言うまでもない。清朝はそのため様々な對策を講じたが、中でも重要なのは康熙九年と十三年にクヤラ佐領と新滿洲佐領の編成を行ったことである。クヤラ佐領と新滿洲佐領はその後東北各地の要衝に移動して、そのまま定住化していったが、彼らの八旗編入と大移動を研究することは、清の北方政策を明らかにするだけでなく、また東北アジアにおける民族形成の問題を考える上で非常に大切な意義をもつ。

ところでクヤラ佐領と新滿洲佐領については、これまであまり研究がなされていない。私はここ數年來、十六、十七世紀における滿洲族の民族移動を研究しているが、前稿ではこのクヤラ佐領と新滿洲佐領の編成に關して、簡單ではあるが

述べるところがあつた。⁽¹⁾だがこの問題についての史料は從來ほとんど残っていないこともあつて、解決できないままに残した課題や追求できなくて犯した誤りが少なくなかつた。幸いにして最近入手することのできた中國第一歴史檔案館『清代譜牒檔案』（内閣）（マイクロフィルム）の第三十八巻と第三十九巻には、東北地區のクヤラ佐領と新滿洲佐領の由來を記した世管佐領執照と輪管佐領執照を收録しており、同様に第四十巻と第四十八巻には、北京の新滿洲佐領の世管佐領執照を載せている。⁽²⁾これらの檔案は、以前の文獻史料と比較して格段に詳細な内容を含んでいる。さらには近年中國において、清代東北の流人に關する研究が進み、⁽³⁾その中から張縉彥『寧古塔山水記・域外集』（哈爾濱、一九八四年）等の流人の著作が公刊されて容易にそれを利用できるようになつた。また私自身も一九八九年に中國において、幾つかの未刊行史料を閲覧する機會を得た。この結果、クヤラ佐領と新滿洲佐領についての諸問題を解決する糸口をつかむことができたのである。本稿では十七世紀後半の北方情勢と關連させながら、まずクヤラ佐領と新滿洲佐領が編成された狀況を明らかにし、次にこれらの佐領が各地に移動したその經過を述べることにする。

第一章 バハイの寧古塔將軍就任とアムール川中流域水系の邊民組織

十六世紀末から十七世紀前半にかけて中國東北地區においては大規模な民族移動が起こり、人口の大半が領域の西南部に集中する。周知の通りこれは清の太祖ヌルハチが、東北地區を統一する過程で、周邊地域の住民を自らの居城近くに強制移住させたことによつてあらわれた現象である。その後を繼いだ太宗ホンタイジもこの徙民政策を繼承し、さらに遠隔地の少數民族を内地に徙した。こうして太宗時代末期には清の勢力は松花江下流域からアムール川中流域、さらには烏蘇里江流域から沿海地方南部にまで擴大したが、住民は盛京（瀋陽）などの西南部地域に移動してしまい、大部分の地域はそのまま放置された。清朝は強制移住させたこれらの少數民族を、みな佐領に編成して八旗に組織している。

ところで周縁地域にいた住民の中には、清に服屬した後もひき續き故郷に留まり、強制移住を免れたものがいた。彼ら

は旗籍から除外されて邊民と呼ばれ、兵役がないかわりに貂皮などの毛皮を進貢する義務を負わされた。⁽⁴⁾邊民の起源はすでに太祖時代に發しているが、制度として一般化するの太宗のときからである。

さて清朝初期においては周縁地域から中心部へと人口の移動が起ったが、清は軍事上の要地については、八旗兵を置いて邊境防衛の任にあたせた。寧古塔（黒龍江省寧安縣）においても八旗佐領が駐防し、東北國境の守備に重要な役割を果たしていた。ところが崇徳末年以後ロシア人がアムール川水系に進出を開始して、各地で破壊と掠奪を繰り返して、流域の邊民組織に甚大な被害をもたらした。始めのうちは手をこまぬいていた清も、やがて寧古塔の八旗兵を繰り出してそれに對抗する。順治九年（一六五二）二月に寧古塔章京海色は二千人餘りの部隊を率いて、アムール川下流のボロン湖東岸にあった烏扎拉村においてハバロフらと交戦するが、かえって大敗を喫してしまつた。⁽⁵⁾本格的な掃討作戰に出ようとするやさきの敗北であつたが、清はただちに寧古塔八旗の再建にとりかかり、七月には海色に代えて梅勒章京シャルフダを登用することにした。⁽⁶⁾續いて十年五月にはシャルフダを寧古塔昂邦章京（康熙元年寧古塔將軍と改稱）に昇格させ、一段と大きな権限を與えている。シャルフダは寧古塔昂邦章京に就任した早々の順治十一年四、五月に、李朝の援軍を得てステパノフらを攻撃し、これに大きな損害を負わせた。さらに十四年には三姓（黒龍江省依蘭縣）東のシャンギャン・ウエヘ（白石）村においてロシア人と戦つて勝利を収める。それから十五年六月には再び李朝の援軍を借りてアムール川下流域で激しく衝突して、ロシア人船隊を壊滅させステパノフを戦死させた。ちなみに順治十二年には固山額眞明安達禮も、アムール上流においてロシア人と戦い勝利している。⁽⁷⁾

シャルフダはロシア人に對して積極的な攻勢をしかける一方で、流域の住民をロシア人の掠奪から守るために安全な上流地域に避難させる措置も行っている。ちょうど順治十二年末から十三年初めの出來事である。これはステパノフらが目撃した事實で、それによると、シャルフダは松花江下流からアムール川中流にかけての沿岸の村落を焼き拂つて、住民をクルガ川（牡丹江）に強制移住させたといふ。⁽⁸⁾中國の記録はこれについて何も傳えないが、順治十五年に同地域を行軍し

た李朝の人申瀏は『行中記事（北征錄）』六月七日の條において、

藥沙家善（*Yak-sa-gasan*、牡丹江口から下流七、八日程の距離にあった村）以下江に沿ひて左右は、舊時村落相ひ續く。賊船侵掠して自りの後、並びに奔竄をなし、今みな丘墟なりと云々。

と松花江下流地域から住民が消えたことを記す。⁽⁹⁾このときにシャルフダが移住させた住民の範圍は、おそらく松花江下流とアムール川中流地域に居住した邊民、しかもその一部だけにとどまったであろう。ただ彼らの移住は、その後アムール川中流域の邊民全體をまきこんだ民族移動にまで發展する。その先驅けとなったものとして、この事件は注目すべき必要がある。

シャルフダはまた、アムール川下流域に對する擴大政策も推進している。順治十年三月にはゲイケレ姓コリハラを派遣して使犬部の十姓を招撫させた。⁽¹⁰⁾後述するように、彼ら十姓は烏蘇里江口よりやや下流のアムール川沿岸に居住していた。このときを境にして、清の勢力はアムール川下流域に浸透し始める。

順治十六年（一六五九）正月にシャルフダがなくなり、寧古塔昂邦章京の後任にシャルフダの子バハイが任命された。⁽¹¹⁾ロシア人はステパノフの死後も依然としてアムール流域で活動を續けていたから、バハイは毎年八旗兵を出して警戒にあたねばならなかった。ロシア側の史料によると、順治十五年から數年間、清の船隊がアムール川下流域を偵察し、一度はオホーツク海に出てトゥグル灣にまで達したという。⁽¹²⁾他方清側の記録としては、吳兆騫『秋笈集』卷七雜感註に次のように述べる。

每歲師を出して黑斤諸部を成る。七月中、河水將に合はんとするに至りて、乃ち歸る。

⁽¹³⁾吳兆騫が寧古塔に流されていた時期は、順治十六年から康熙二十年（一六八二）までの間である。この詩が何年に創作されたかは不明であるが、註自體は康熙初め頃の事實とみてよいだろう。ヘジェンは、アムール川中・下流域に住む少數民族である。



略圖 アムール川中流域水系の村落

(『滿漢合璧清內府一統輿地秘圖』、『乾隆內府輿圖』、『盛京吉林黑龍江等處標注戰蹟輿圖』それに L. von Schrenck, *Reisen und Forschungen im Amurlande in den Jahren 1854—56*, (St. Petersburg, 1858—81) の地圖を参照して作成。)

この閒清軍はアムール川流域において、ロシア人とたびたび衝突している。順治十六年三月には寧古塔梅勒章京尼噶里らが、ロシア人と戦ってこれを破った。また翌十七年七月にはバハイ自らが兵を率いてアムール川を下り、グファティン村附近においてロシア人の殘黨を掃討し、彼らの船と武器を捕獲する。⁽¹⁴⁾ 康熙三年になってロシア人が再びアムール流域に進出すると、バハイは同年五月に黑喇蘇密なる地點でこれを大破した。⁽¹⁵⁾ このときのロシア人はかなりの規模であったとみえ、バハイはこの戦役において寧古塔に流謫されていた流人を大量に動員している。それまでは比較的に優遇されていた知識人まで水手などの名目で驅り出した。⁽¹⁶⁾ こうしてバハイはアムール川中・下流域を力で制壓し、ロシア人をほぼ一掃することができた。

軍事的な成功とともに、アムール川下流域の少數民族に對するバハイの招撫政策も着實に成果を収めた。遠くはアムール川川口附近にいたフィヤカやキレルの中にも、清朝に歸順して貂皮等を進貢するものが現れ、邊民組織はアムール川下流域において確實に擴大していったのである。⁽¹⁷⁾

ここで順治末から康熙初めにおけるアムール川中流域の邊民組織を調べてみよう。この場合最も基本的な史料は『清實錄』であるが、殘念なことにそれは邊民が清に貂皮等を進貢した事實を記すのみで、それ以外のことについてはほとんどふれない。これに對して『清代中俄關係檔案史料選編』第一編（北京、一九八一年）所引の禮科史書（第一―六號檔案、順治十年三月）は、松花江下流域とアムール川中流域に住む邊民の村落や戸數まで詳細に記録しており、『清實錄』の缺を十分に補う。そこで兩者の内容を検討すると、アムール川中流域水系の邊民組織は大きく言って、フルハ（松花江、黑龍江フルハ部）とクルカの二集團からなっていた。⁽¹⁸⁾ まずフルハ系の邊民には、メルジエレ、トホロ（トコロ）、バヤラ、ケイケレ、フシハリ、ウジャラ、ヘイ（ヒイエ）、ヌイエレ（ルイエレ）、科爾佛科爾などの氏族（姓）が含まれる。この中ではメルジェレ氏族が強力であり、その名はステパノフの記録にも見える。メルジエレの姓長キャントゥリはしばしば清に貂皮を進貢した。フルハ系の邊民は大體、松花江下流からアムール川中流にかけての兩岸に村落を開いて生活していた。たとえばト

ホロ姓の場合は、クブチャラ、コルチ、メルテイ、グファティンなどの村落に居住したことが知られている。次にクルカ系の邊民としては、加哈禪と頼達庫らの名をあげることができる。彼らは一時熊島（アスコリド島）に據つて反亂を起こしたが、崇徳四年（一二三九）に清に降つたあとは沿海地方南部のヤンチュ地方に徙され、邊民となつて海豹皮を進貢していた。その後順治初め頃に琿春に移住したらしい。⁽¹⁹⁾クルカの氏族名としては、この段階ではかううじてクヤラの名がわかるだけである。その理由は明らかではないが、クルカの名はやがて史上から姿を消し、かわつてクヤラという名稱が現れる。彼らの大多數は、沿海地方の南部地域と烏蘇里江流域に居住していた。

アムール川中流域水系においては、當時フルハ（松花江、黒龍江フルハ部）とクルカ以外にも幾つかの地域的な邊民の集團が存在していた。たとえば『清實錄』天聰九年正月丙寅の條には、「使犬部落索瑣科」が黒狐皮等を進貢したという。

『吉林依蘭縣志』人物門によれば、ソソコなる人物は葛克勒^{ゲク}姓の總部長であつて、もともとは德新^{デシ}村に居住していた。デシン村の位置はまだ特定できないが、烏蘇里江口近くのアムール沿岸にあつたことは疑いない。⁽²⁰⁾これに對して禮科史書

は、ソソコの孫庫力甘^{コリカン}をフルハと呼んでいる。⁽²¹⁾さて順治以降の史料で使犬部と言へば、一般にはアムール川下流域に居住したいわゆる十姓を指すが、ゲイケレ姓はこの十姓の中には含まれない。さらに使犬部十姓が清に初めて朝貢したとき

に、清の使者として十姓に歸順することを説得に行ったのはコリハ自身であつたことからしても、彼らを使犬部と考えることはできない。ところで『清實錄』康熙二年三月壬辰の條には、「四姓庫里哈^{コリハ}」と記されている。この四姓とは、ゲイケレ姓とともに牡丹江口附近、つまりのちの三姓に移住したフシハリ、ヌイエレの二姓とヌイエレ姓に從屬するシムル

姓を言うと考えられる。⁽²²⁾彼らの移住が三姓という地名の起源となつたことは、周知の通りである。フシハリ以下の三姓は、この時期には烏蘇里江口より少し上流のアムール川沿岸に住んでおり、フルハとは居住地域が重なっている。⁽²³⁾また四

姓中のゲイケレとヌイエレ兩姓は、フルハのゲイケレ、ヌイエレ姓とかつて同族であつたとみられるのに對して、フシハリ姓はフルハにも十姓にも同姓が存在する。これからコリハら四姓は、本來はフルハとも十姓とも關係をもつていたとみ

られるが、おそらくこの段階においては兩者から離脱して獨自な集團に成長しつつあったのであろう。

ちなみに四姓より下流のアムール川沿岸には、使犬部十姓が居住していた。禮科史書によれば、この十姓とは副使哈喇、吳甲喇、畢兒達齊里、黑吉格勒、加克素鹿、夏即喇、綽各樂、涂墨拉勒、何面、趙兒果樂の各姓からなっていた。⁽²⁴⁾當時の史料を検索すると、使犬部という名稱とともにヘジェ(ン)なる呼稱が頻出する。『清實錄』においては赫哲とあり、『秋笈集』と吳振臣『寧古塔紀略』では黑斤、張縉彦『寧古塔山水記』と張賁『白雲集』には黑筋とつくるが、みな同音異譯である。それらによると、ヘジェ(ン)はフルハとは異なる習俗をもち、辮髪にはせず長髪のまま、イアリング等の裝飾品を身につけるところに特徴があったという。⁽²⁵⁾一方、楊賓『柳邊紀略』卷三は、アムール川、松花江、烏蘇里江の三江が合流する附近には不剃髮黑金という勢力があつて、彼らは使犬國とも呼ばれ全部で十數姓からなつていたと述べる。不剃髮黑金が十姓を指すことは明らかである。十姓はヘジェ(ン)とも呼ばれたのである。ただ『柳邊紀略』は十姓の居住地域を三江が合流するあたりとするが、彼らを招撫に行つたコリハラ四姓が烏蘇里江口附近にいた事實から推して、少し上流にかたよりすぎている。『三姓副都統衙門檔案』に見えるように、十姓は當時もやはり、大體烏蘇里江口からキジ湖までのアムール下流沿岸に住んでいたと考えてまちがいない。⁽²⁶⁾

さて烏蘇里江流域にも、地域的な勢力が形成されていたことは疑いない。彼らに關しては零細な史料しか残っていないが、『清實錄』において、順治末から康熙初めにかけて邊民の進貢地點が北京から寧古塔に變更になつた際に、烏蘇里江流域の集團が二、三あがつているので、ここではそれを手がかりにして検討してみたい。まず『清實錄』康熙三年二月己亥の條には、「東部木里雅連頭目朱木藍、那木都喇頭目賽必那、祁他喇頭目鈞勒甚等」に對して、寧古塔に進貢するように命じているが、彼らは烏蘇里江流域に居住した邊民である。このうち那木都喇は、ナムドゥル氏族のことである。ナムドゥルは綏芬や琿春など東部地域に廣く分布したが、⁽²⁷⁾その一部は烏蘇里江流域にも廣がつており、ステバノフもまた烏蘇里江のナムドゥル氏族からヤサクを徵收している。⁽²⁸⁾賽必那らも烏蘇里江流域にいたとみられる。祁他喇はキタラ姓を指

す。鉤勒甚は後述する新滿洲佐領のうちのひとりゲオルシェンで、もともとは烏蘇里江のオー・ホンク村に住んでいた。⁽²⁹⁾これに對して木里雅連ははっきりしない。漢字音から類推すると、『柳邊紀略』卷三の穆連連にあたるかもしれない。この穆連連は、木倫(輪)つまり烏蘇里江西岸の支流穆稜河が語源であるという。いずれにせよ、これらの氏族が烏蘇里江流域に居住していたことは認めてよいであろう。

次に『清實錄』康熙五年二月癸酉の條には、清が烏蘇里江右岸の支流アクリ(現マリノフカ)、ニマン(現大ウスルカ)川附近にいた阿思虎利ら六姓に對して、寧古塔に進貢するように命じている。六姓についてはほかに情報はないが、雍正十年(一七三三)に三姓佐領に編成された八姓(七姓ともいう)の人びとがそれに該當するかもしれない。これらの八姓は、もともとアクリ、ニマン川口よりやや下流に位置する烏蘇里江沿岸のデクダンギ村等に住んでいたからである。⁽³⁰⁾

第二章 康熙九年のクヤラ佐領編成とその吉林移住

順治帝の後を嗣いだ康熙帝はまだ八歳の幼少であつたので、即位當初は四人の輔政大臣をたてて政治にあたさせた。やがてその中から鰲拜が、他の三人を排除して實權をふるい始める。成長した康熙帝は、康熙八年五月に鰲拜を倒して自ら權力を掌握し、これ以後名實ともに親政を行うことになった。康熙帝は先朝以來懸案となつていた北方問題に關して、ロシアと直接の交渉を行う一方で、戰爭は避けられないと見て北邊の防備を着々と増強している。アムール川中流水系の邊民を康熙九年と十三年の二度にわたつて八旗に編入したことは、こうした施策のひとつである。まず本章ではクヤラ佐領の編成とその後の移駐について明らかにしたい。

康熙三年以降アムール川中流域においては一時的に戦火が止むが、⁽³¹⁾上流域ではこの閒にもロシア人の活動は續いていた。翌四年に官憲から追われたチエルニゴフスキーらがアルバジン(雅克薩)を占據してから、ロシア人は再びアムール川流域をめざして殺到するようになる。そして八年秋には流域の邊民に壓迫を加えたので、清朝の内部でもこれを放置して

おくことはできなくなった。⁽³²⁾ 早くも七月には寧古塔周邊の兵力をふやすことを検討し始め、⁽³³⁾ 九年（一六七〇）になって大規模な新佐領の編成を行った。これがいわゆるクヤラ佐領である。陳儀『陳學士文集』卷十薩布素傳によれば、寧古塔將軍ババイは同年に康熙帝の詔を受けて、烏蘇里江流域の「瓜爾察部族」を寧古塔に徙したという。瓜爾察は一般には松花江中流域に居住しており、烏蘇里江流域にはいない。ここでは正しくは、クヤラ（庫雅拉）とすべきである。さて『清代譜牒檔案』を見ると、ババイはこのときに全部で十四のクヤラ佐領を組織したという。⁽³⁴⁾ 表1中の(1)から(4)までの四佐領は、『清代譜牒檔案』から拾い出したクヤラ佐領の一部である。(1)トニオらの出身地ヤラン川と(4)トゥルフアチャらの故郷ヒルは、ともに沿海地方の南部にある河川である。(2)ネリオらの出身地ビルテンも、烏蘇里江流域から沿海地方にかけて存在した地名とみられる。

ここで『吉林通志』卷六十四職官志によれば、康熙九年に吉林烏拉（以下吉林と稱す）において八佐領が設置されたといひ、それを表にすると次の通りである。この中で表2の(2)托紐は表1の(1)トニオに、同じく表2の(3)訥留、(8)圖勒法察は、それぞれ表1の(2)ネリオ、(4)トゥルフアチャに該当する。また表2の(5)哩佛と(7)滿珠那は、康熙初めに清朝に朝貢したことのある「尼麻察姓頭目佛柳」と、「吳蘇路烏喇居住滿朱納」にあたとみられる。⁽³⁵⁾ 表2の八佐領は、クヤラ佐領の一部である。ただ『吉林通志』がこれらの佐領を九年當時から吉林に設けたとする點は、正確ではない。というのはクヤラ佐領は、翌十年になって寧古塔から吉林へ移動するからだ。『吉林通志』は寧古塔を経由した事實を省略して、佐領編成時の九年にさかのぼらせて吉林佐領としたのである。『吉林通志』のこうした記述の仕方は、後述する新滿洲佐領についても同様である。

『清代譜牒檔案』の世管佐領執照等によれば、表1の(1)から(4)までのクヤラ佐領は、八旗に組織される以前にはみな貂皮か江獺皮を清に進貢しており、また佐領に任用されたトニオら四人は、いずれも郷長（*gasan i da*）の職にあった。一方『吉林通志』においては、八人のクヤラ佐領全員に對して「嘎山達」とか「屯長」とか稱しているが、これはともに郷長

姓	居 住 地 (移駐地)	備 考
Yanja, Nimaca, Colhoro, Gejile, Hekile Kūyala, Fuca, Gioro Giyooacan, Nimaca Nimaca, Gejile, Sakda, Murcan	Yaran 川源→ <u>琿春</u> Bohori→吉林 Bilten→ <u>寧古塔</u> →吉林 烏蘇里地方→ <u>綏芬</u> →吉林 Hilu→ <u>琿春</u> →吉林	

姓	居 住 地 (移駐地)	備 考
庫雅拉(Kūyala) 鄒扎(Yanja) 庫雅拉(Kūyala) 尼赫哩(Niohuru) 尼瑪察(Nimaca) 庫雅拉(Kūyala) 尼瑪察(Nimaca) 尼瑪察(Nimaca)	烏蘇哩綏芬→吉林 烏蘇哩雅蘭河源→吉林 必勒特爾→吉林 烏蘇哩→吉林 烏蘇哩綏芬→吉林 興喀(興凱湖)→吉林 ?→吉林 喜路→吉林	

のことである。これらの事實から明らかな如く、彼らはもとは清の邊民であつた。つまり康熙九年のクヤラ佐領は、烏蘇里江流域と沿海地方南部の邊民を對象に組織したものである。

『清代譜牒檔案』によると、クヤラ佐領を構成したクヤラの氏族は次のふたつのグループに分類することができる。第一はギオロ、フチャ、ニマチャなどの氏族。第二はクヤラ、ヤンジャ、ゲジレ、ヘキレ、ムルチャンなどの氏族。前者の氏族は本來、東北地區の全域に廣く分布したのに對して後者は烏蘇里江流域と沿海地方南部だけに存在した。クヤラ佐領は、これらの氏族が幾つか複合して形成されたのである。

ところで世管佐領執照等はこの時

表1 康熙九年編成クヤラ佐領（『清代譜牒檔案』による）

旗 分	區 分	佐 領	舊職	貢納品	率いた 丁 數
(1)正黃	クヤラ	<u>Tonio</u> →Sibiyaka→Mergu→…[Sengboo] ^②	郷長	貂皮	27戸 53丁
(2)正紅	クヤラ	<u>Nerio</u> →Elhūn→Mujuhu→…[Erdeni]	郷長	貂皮	55丁
(3)鑲白	クヤラ	Miyooacan→Tungsele→Šubene→[Asha]	郷長	貂皮	
(4)鑲藍	クヤラ	<u>Tulfaca</u> →Tetule→Dariha→…[Jusimboo]	郷長	江獺皮	71丁

註① 下線を引いた人物は、佐領編成時の佐領である。

② 鉤括弧内の人物は、世管佐領（または輪管佐領）と認定された當時の佐領である。

③ 下線を引いた地名は、佐領編成時に居住していた場所である。

（以下同じ）

表2 康熙九年編成吉林佐領（『吉林通志』職官志による）

旗 分	區 分	佐 領	舊職	貢納品	率いた 丁 數
(1)鑲黃		滿吉那→…	嘎山達 (郷長)		
(2)正黃		托紐→西畢雅喀→莫爾固→…	嘎山達		
(3)正紅		訥留→額勒渾→穆珠胡→…	嘎山達		
(4)鑲白		佈克都哩→…	屯 長 (郷長)		
(5)鑲紅		哩佛→…	嘎山達		
(6)鑲紅		扎斯胡里→…	嘎山達		
(7)鑲藍		滿珠那→…	嘎山達		
(8)鑲藍		圖勒法察→特圖勒→達哩哈→…	嘎山達		

期のクヤラの状況に關して、ある重要な事實を明らかにする。彼らは佐領に編成される以前から、すでに清朝の内部に移住を始めているのである。たとえばトニオら五十三丁は、遅くとも康熙二年までには故郷のヤラン川流域から琿春東方のボホリ村に移住しており、そこから清に進貢していた。⁽³⁶⁾ さらにトゥルフアチャら七十一丁は、佐領に編成されるよりも前にヒル地方から琿春に移っていた。⁽³⁷⁾ ミョーチャンらももとは烏蘇里江地方の出身であったが、康熙九年當時は綏芬地區に居住していた⁽³⁸⁾。それからネリオら五十五丁も九年以前にすでに寧古塔に移住していた。⁽³⁹⁾

康熙初め頃に北方において人口の移動が起こっていたことは、『李朝

實錄』にも記録されている。顯宗六年（康熙四年）前後に清は、琿春に徙していた「雪海島」出身の丐知介たちの中から適當なものを選んで寧古塔に移住させたという。⁽⁴⁰⁾ 彼らは前述した加哈禪らの子孫であろう。

さて清朝は康熙九年に寧古塔に集めたクヤラ佐領を、翌年にはさらに吉林まで移動させている。⁽⁴¹⁾ この頃にはロシアとの戦いを前にして、吉林の軍事的な重要性が高まっていたから、バハイは康熙十年にふたりいた寧古塔副都統のうちアンジュフを吉林に移駐させた。アンジュフと同時に十一佐領、七百名もまた寧古塔から吉林に移駐しており、⁽⁴²⁾ その中にはもと内河地方に居住したタタラ姓も含まれていた。⁽⁴³⁾ クヤラ佐領の吉林移住は、アンジュフらの移駐と前後して行われたと考えられる。表1の(3)アスハ（ミョーチャン）の輪管佐領執照によれば、ミョーチャンらが吉林に進駐する際に、バハイは彼らに對して途中の食料と驛車を支給したという。⁽⁴⁴⁾

第三章 康熙十三年における新滿洲佐領の編成

康熙帝は、康熙十年（一六七二）八月から十一月にかけて東北地方に初めて東巡している。それは表むき盛京周邊にあった祖陵に參詣するためであったというが、それ以外に緊迫する北邊の状況をじかに視察することもまた、目的のひとつであったはずである。康熙帝は十月三日（辛巳）と十四日（壬辰）に寧古塔將軍バハイを引見して、⁽⁴⁵⁾ アムール川地域に進出したロシア人への對策とともに、流域に住む少數民族の問題について話し合っている。このときに康熙帝とバハイがどこまでつづこんだ話し合いを行ったかは定かではないが、これから述べる康熙十三年のフルハ等による新滿洲佐領の編成は、この會見がその伏線になったのではないだろうか。

さて現在黑龍江省富裕縣三家子村に住む農民、陶氏（トホロ氏族）に傳わる家譜によると、陶氏の先祖イカンダらはもとは松花江下流のオキヤ（オーキヤ）村とガイギン村（現街津口）に居住する邊民であったが、康熙十一年になって新滿洲佐領に組織されたという。⁽⁴⁶⁾ そもそも彼らは新編成された十四佐領の缺額八十九甲に補充されるはずであったが、バハイの判断

で獨立した一佐領を形成することになった。家譜ではこの十四佐領に關する説明はないが、それ以前に新滿洲佐領を編成したという事實はないので、十四という數字から見て、吉林のクヤラ佐領とするのが妥當であらう。のち康熙二十九年に吉林駐防の二十一佐領が黑龍江方面に移駐するが、陶氏の祖先もそのときいっしょに移住したものと推測される。

ついで十三年（一六七四）には、新滿洲四十佐領が組織される。この四十という數字は一度に編成された佐領數としてはきわめて大規模なものである。同年寧古塔將軍バハイは、「兵にすべき民を選んで佐領を組織させ、佐領と驍騎校を任じて次第に（内地に）進ませながら教育して國家の用に備えたい」と上奏して許され、五月二十一日に章京と八旗兵を率いて「ワルカ部」のもとに出かけ、四千丁餘りを四十の新滿洲佐領に編成した。⁽⁴⁷⁾『清代譜牒檔案』に收録されている世管佐領執照を検討して、次の十七佐領が康熙十三年に編成された新滿洲佐領であることがわかった。表3の(1)から(11)までと(13)から(18)までの佐領である。それから東洋文庫にもまた、新滿洲佐領の世管佐領執照が一部所藏されている。⁽⁴⁸⁾

他方『吉林通志』職官志と『錦縣志』（民國九年序）、『義縣志』（民國二十年）、『八旗滿洲氏族通譜』から新滿洲佐領をすべて拾いあげると、表4と表5のようになる。表4の寧古塔佐領(1)科勒德、(2)投軍、(3)瑚哈圖は、表3の(1)ケルゲ、(2)テオチェ、(3)フハトゥにそれぞれ該當する。また表4の吉林佐領(8)喀栢、(9)克紐、(10)珠蘭塔、(11)溝祿神は、表3の(5)カバイ、(6)ケニオ、(7)ジュランタ、(8)ゲオルシェンと同一人物である。なお後述するように、これらの佐領が實際に吉林と寧古塔に移動するのは、康熙十五年以後のことである。それにもかかわらず『吉林通志』職官志がそれを十三年とするのは、クヤラ佐領の場合と同様に、佐領が形成された時點にさかのぼらせているからである。

ところでこれらの新滿洲四十佐領も、十三年より以前は邊民組織に屬していた。世管佐領執照等によれば、表2の十八佐領はかつてはみな清に貂皮を進貢していたし、また佐領に任用された人物はすべて姓長(Cala-i-da)と郷長の職にあった。たとえば(8)ゲオルシェンは『清實錄』康熙三年二月己亥の條において、寧古塔に進貢することを認められた祁他喇頭目鉤勒基その人である。同じく(2)テオチェは、禮科史書に見えるトホロ姓の頭轍にあたる。⁽⁴⁹⁾テオチェも當時は、邊民組織

率いた 丁 數	姓	居 住 地 (移駐地)	備 考
73(90)丁	Meljere	Amida→ <u>三姓</u> →寧古塔	
127丁	Tokoro, Akjara	Omin→ <u>Nooro 地方</u> →寧古塔	
60(101)丁	Hiye, Durulu	Oogin→ <u>三姓 Wadan</u> →寧古塔	
15戸 45丁	Meljere	黑龍江口 Ice Susu→ <u>三姓 Burhoo, Wengken</u> →寧古塔	康熙十五年 獨立
86丁	Ujala	Gaijin→寧古塔→吉林	
68丁	Kocoli, Nara	Aküli 地方→寧古塔→吉林	
125丁	Kidumu, Ilari, Nimaci, Hekile, Beikure	烏蘇里地方→寧古塔→吉林	
72丁	Kitara, Sakciri	烏蘇里內 Oo Hongkū→Hūrga→吉林	
115丁 〈57丁〉②	Heye	Wengken 地方→寧古塔→吉林	康熙十五年 獨立
101丁 〈52丁〉	Tokoro	Bijan 地方→ <u>Lahū</u> →吉林	康熙十五年 獨立
105丁 〈73丁〉	Melderi, Meljeri	Bijan 地方→寧古塔→吉林	康熙十五年 獨立
80丁	Hiye, Ujala	Lefu, 松花江 Haran→…→盛京	
80丁	Tokoro	Weken 川, 松花江 Deihen→…→盛京	康熙十七, 十八年頃獨 立
93丁 〈45丁〉	Bayara	松花江 Aolimi Susu→…→盛京	康熙十五年 獨立
44戸 166丁	Meljere, Niohuro Amuru, Bayara, Gengkere	黑龍江 <u>Omolho</u> →寧古塔, 吉林→北京	
37戸 127丁	Meljere, Fuca Gūwalgiya, Budara	黑龍江→ <u>Manaha</u> → <u>Hūrhan Tokso</u> →寧 古塔, 吉林→北京	
41戸 158丁	Tokoro	喀木屯→寧古塔, 吉林→盛京→北京	
32戸 77丁	Tokoro, Gioro	Dabako Susu, Aoki→…→黑龍江 (→墨爾根→齊齊哈爾)	

表3 康熙十三年編成新滿洲佐領（『清代譜牒檔案』等による）

旗 分	區 分	佐 領	舊職	貢納品
(1)正紅	新滿洲	<u>Kelde</u> → <u>Enebu</u> → <u>Jahara</u> →[<u>Ekite</u>]	郷長	貂皮
(2)正藍	新滿洲	<u>Teoce</u> → <u>Hurku</u> → <u>Kanio</u> →[<u>Tundari</u>]	姓長	貂皮
(3)鑲藍	新滿洲	<u>Hūhatu</u> → <u>Anai</u> → <u>Yabgio</u> →…[<u>Lungboo</u>]	郷長	貂皮
(4)鑲白	新滿洲	<u>Eljio</u> (<u>Elju</u>)→… <u>Dedušen</u> → <u>Yongkū</u> →…[<u>Jarsai</u>] ①	郷長	貂皮
(5)正紅	新滿洲	<u>Kabai</u> → <u>Iruya</u> → <u>Hūwašan</u> →[<u>Handu</u>]	郷長	貂皮
(6)正紅	クヤラ	<u>Kenio</u> → <u>Nalbica</u> → <u>Teru</u> →…[<u>Tungbei</u>]	郷長	貂皮
(7)鑲白	新滿洲	<u>Julanta</u> → <u>Jilahū</u> →[<u>Fada</u>]	郷長	貂皮
(8)鑲藍	新滿洲	<u>Geolušen</u> → <u>Eidungku</u> → <u>Ahana</u> →…[<u>Nikan</u>]	姓長	貂皮
(9)正黃	新滿洲	<u>Calbišan</u> →… <u>Naona</u> → <u>Sobcon</u> →…[<u>Seltu</u>]	姓長, 郷長	貂皮
(10)正白	新滿洲	<u>Imnece</u> →… <u>Werhemu</u> → <u>Borkūn</u> →…[<u>Duwadi</u>]	郷長, 郷長	貂皮
(11)正藍	新滿洲	<u>Hangko</u> →… <u>Ninggune</u> → <u>Jimsu</u> →…[<u>Faboo</u>]	郷長, 郷長	貂皮
(12)正黃	新滿洲	<u>Soldon</u> → <u>Bašili</u> → <u>Bildun</u> →…[<u>Asitu</u>]	郷長	
(13)鑲白	新滿洲	<u>Baniokan</u> →… <u>Yacuha</u> → <u>Jartai</u> →…[<u>Ulimboo</u>]	郷長, 郷長	貂皮
(14)鑲白	新滿洲	<u>Tahana</u> →… <u>Tolonggo</u> → <u>Faktaka</u> →…[<u>Kecio</u>]	郷長	貂皮
(15)鑲黃	新滿洲	<u>Januka</u> → <u>Kišao</u> → <u>Januka</u> →…[<u>Saintu</u>]	姓長	
(16)鑲黃	新滿洲	<u>Elju</u> → <u>Wario</u> → <u>Simtu</u> →…[<u>Otonggo</u>]	郷長	
(17)正白	新滿洲	<u>Kimna</u> → <u>Baitangga</u> → <u>Arungga</u> →[<u>Dumbai</u>]	郷長	
(18)鑲白	新滿洲	<u>Cimao</u> → <u>Durho</u> → <u>Dayuka</u> →…[<u>Kandai</u>]	郷長	貂皮

註① 二重下線を引いた人物は、分離獨立したときの佐領である。

② < > 内の丁数は、獨立したときの人數である。

率いた丁數	姓	居 住 地 (移駐地)	備 考
	孟 (Meljere) 陶 (Tohoro) 何 (Hiye)	阿木達→寧古塔 臥密→寧古塔 熬金→寧古塔	
	孟 (Meljere)	黑龍江口→寧古塔	康熙十五年獨立
	莫勒哲爾 (Meljere) 何業 (Hiye) 吳扎拉 (Ujala) 闊綽哩 (Kocoli) 奇杜穆 (Kidumu) 吳扎拉 (Ujala) 齊圖哩 (Kitara)	博爾后→吉林 翁肯→吉林 …→吉林 街津→吉林 阿庫哩→吉林 烏蘇哩→吉林 西爾河→吉林 烏蘇哩藕洪闊→吉林	
	何業勒 (Hiye) 莫勒德里 (Melderi)	…→吉林 …→吉林	康熙十五年獨立 康熙十五年獨立

貢納品	率いた丁數	姓	居 住 地 (移駐地)	備 考
	64戸 205丁 31戸 115丁 80丁	巴牙拉 (Bayara) 赫葉 (Hiye) 赫葉 (Hiye) 兀札喇 (Ujala) 託濶羅 (Tohoro)	木倫地方 (西拉科)→…→錦州 舒勒赫 (Šulhe)→寧古塔→…→錦州 白石 (Šanggiyan Wehe)→…→錦州 瓦丹 (Wadan)→…→吉林→義州 西爾虎→…→義州	

表4 康熙十三年編成新滿洲佐領（『吉林通志』職官志による）

旗 分	區 分	佐 領	舊 職	貢納品
(1)正 紅		科勒德→額訥佈→扎哈拉→…	鄉 長	
(2)正 藍		投車→瑚爾庫→喀鈕→…	族 長 (姓長)	
(3)鑲 藍		瑚哈圖→阿奈→雅普久→…	鄉 長	
(4)鑲 白		珠穆那喀→德都伸→永闊→…	鄉 長	
(5)鑲 黃		杭鰲→…	嘎山達	
(6)正 黃		察勒碧山→…	哈賴達 (姓長)	
(7)正 白		永保		
(8)正 紅		喀栢→依祿雅→花山→…	嘎山達	
(9)正 紅		克鈕→那勒碧察→特祿→…	嘎山達	
(10)鑲 白		珠蘭塔→吉爾浩→法達→…	嘎山達	
(11)鑲 紅		尼克山→…	嘎山達	
(12)鑲 藍		溝祿神→額依通庫→阿哈那→…	嘎山達	
(13)正 黃		撓那→舒博春→色爾圖→…	嘎山達	
(14)正 藍		寧武訥→吉木舒→佛德里→…		

表5 康熙十三年編成新滿洲佐領（『八旗滿洲氏族通譜』と地方志による）

旗 分	區 分	佐 領	舊 職
(1)鑲黃	新滿洲	都鈕→阿隆阿→買京阿→…	屯 長 (鄉長)
(2)正黃	新滿洲	烏凌額→滿達→達達保→…	
(3)正黃	新滿洲	挪那 (Noona)→顏達布 (Yandabu)→德格 (Dege)→…	
(4)正黃	新滿洲	布克綽 (Buktao)→…	
(5)鑲紅	新滿洲	拉西達→呢什哈→依普九→…	里 長 (鄉長)

に入っていた。さらに(16)ジャヌカは、有名なメルジェレ氏族の姓長キャントゥリの子である。それから表3の(10)エルジン、(17)キムナ、表5の(1)都鈕、(2)烏凌額らも早くから清朝に對して進貢していた。『八旗滿洲氏族通譜』と『八旗通志初集』⁽⁵⁰⁾はこの四人について、「世代（累世）誠を輸し貢を進む」とか「其の誠を輸し貢を進むること年久し」と表現している⁽⁵⁰⁾。

『清代譜牒檔案』によると、バハイはワルカ部の土地に出かけて住民を八旗に組織したというが、ワルカは普通には圖們江（豆滿江）北部地域の住民を指す。だが彼らのほとんどは太祖時代に西南部地域に移住してしまつたので、それ以來ワルカという言葉はめつたに現れなくなる。まれにワルカを使う場合があるが、そのときは大體フルハの意味である。これもその例である。確かに表3と5を検討すると、これら新滿洲佐領の大半は、フルハ系の邊民に屬している。彼らの多くが本來、松花江下流とアムール川中流方面に住んでいたこと、そして彼らがメルジェレ、トホロ、バヤラ、ウジャラ、ヒイエ等のフルハ系の姓を稱したことなどによって、それは明白である。ただ(6)ケニオと(8)ゲオルシンの存在からもわかる通り、その中にはクヤラや烏蘇里江流域の集團も含まれており、新滿洲佐領がアムール川中流水系全體の邊民を對象とするものであったことはまちがいない。

將軍バハイは同年十一月に新滿洲佐領四十名を率いて上京し、康熙帝に謁見する⁽⁵¹⁾。康熙帝は翌年正月にバハイ以下新滿洲佐領に對し、様々な恩賞を與えた。十三年五月から始まつた新滿洲佐領の編成は、ここに一應完了した。

さてバハイが新滿洲佐領に任じたものは、ほぼ例外なしにもとの姓長と郷長であつた。(5)ハンドウ（カバイ）の世管佐領執照によると、康熙十三年に新滿洲佐領を組織したときに、バハイは邊民の姓長は四品の佐領に、郷長は五品の佐領に任用したという⁽⁵²⁾。確かに表3の(9)チャルビシャンはヒイエ姓の姓長であつたので、四品の佐領に任じられており、また(1)ケルデも郷長から五品の佐領にあてられた⁽⁵³⁾。しかし翌年にはこの規則を修正し、全佐領をそれぞれ一品ずつ上げて三品と四品に昇格させたが、もしその後現任の佐領に異動が生じたときには、後任の佐領はみな均しく四品とすることにした⁽⁵⁴⁾。

十三年に八旗に編入された邊民の姓長と郷長の大多數が佐領の地位を得た中で、佐領よりも一ランク下で佐領に従屬する驍騎校にしか任用されなかったものも、少數ではあるが存在した。當然のことながら彼らは、自らの處遇に強い不満を持っていた。そのため驍騎校のニングネらは、現在の佐領から離脱して獨自の佐領を形成したいと訴えた。彼らの願いは認められて、康熙十五年に四十佐領の中から十二佐領が新たに分離、獨立する。⁽⁵⁵⁾表3の(11)ニングネらは、このときにハニコの佐領から獨立した。同様に(9)ナオナ、(10)ウエルヘム、それから(4)デドウシエン、(14)トロング、(15)キシヤオも、それぞれ新佐領を形成している。要するに康熙十三年と十五年に、全部で五十二の新滿洲佐領が編成されたのである。

第四章 新滿洲佐領の移住

新滿洲佐領の大多數は、クヤラと同じように、八旗に編入される以前から三姓や寧古塔方面に移動を始めていた。⁽⁵⁶⁾この點について世管佐領執照は明白に述べる。まず三姓周邊に移住していたものの例としては、表3の寧古塔佐領(1)、(3)、(4)をあげることができる。ケルデらはもとアミダ村の出身であったが、康熙十三年の佐領編成時には三姓に住んでいたし、⁽⁵⁷⁾またフハトゥらも早い時期に、松花江下流のオーギン(オーキヤ)地方から三姓近傍のワダン村まで移住していた。⁽⁵⁸⁾それからデドウシエンら四十五丁は松花江下流域にあったイチエ・スス村の出身であるが、十三年當時は三姓周邊のブルホー村とウエンケン川(倭肯河)流域に移っていた。⁽⁵⁹⁾さらに(10)エルジュらも、早くから三姓附近に移動している。その世管佐領執照によれば、ワリオの父ヒルフワンは百二十七丁を率いて故郷の黑龍江から三姓東のマナハ村に到り、郷長の地位を與えられた。ヒルフワンが病歿した後、⁽⁶⁰⁾おいのエルジュが郷長を繼いだが、エルジュらは再びフルハン・トクソ村に移住し、そこで新滿洲佐領に入ったという。⁽⁶¹⁾フルハン・トクソ村は三姓附近の村名とみられる。それから吉林佐領(8)ゲオルシエンらも、三姓へ移動していた集團のひとつである。ゲオルシエンは清朝に進貢した康熙三年以後のある時期に、七十二丁とともに烏蘇里江のオー・ホンク村からフルガへと移住している。

次に康熙十三年以前に寧古塔方面に移住していた新滿洲の例としては、吉林佐領の(5)、(6)、(7)、(9)、(10)、(11)をあげることができる。カバイらは故郷のガイジン(ガイギン)村から寧古塔に進み、佐領編成時には寧古塔に居住していた。⁽⁶²⁾さらにクヤラのケニオらはアクリ川流域から、同じくジュランタラ百二十五丁は烏蘇里江地方から、ナオナらは三姓東のウーケン地方から、そしてーングネラ百五丁はアムール中流北岸の支流ビジャン川附近から、それぞれ寧古塔に移動してき⁽⁶³⁾た。それからウエルヘムら百一丁は佐領に編成される以前に、ビジャン川からラフに移っている。⁽⁶⁴⁾このラフとは、寧安の北に位置して牡丹江と海浪河が合流する附近にある拉古を指すであらう。

康熙初め頃に寧古塔周邊に邊民が移住を始めていた事實は、寧古塔に流謫された流人たちの著書からも確認することができる。張縉彦『域外集』三孝義傳には、寧古塔舊城の南東にあった交羅(覺羅)⁽⁶⁵⁾村中に「烏棘」が居住していたことを述べる。この烏棘はアムール川中流域水系の邊民を言うと考えられる。また康熙九年から十二年まで寧古塔に流されていた張賁の『白雲集』卷七寧古臺新城記にも「阿磯、魚皮、黑筋、赤臂諸族」を近頃徙して内附させたが、彼らはそれを行⁽⁶⁶⁾らんで故郷に戻りたがっていると記す。これらはみな、アムール川中、下流域の少數民族である。

三姓と寧古塔以外の土地に移った佐領としては、(2)テオチェらの場合をあげられる。テオチェらはオミン地方から烏蘇里江西岸の支流撓力河流域に至り、そこで新滿洲佐領に編成された。⁽⁶⁶⁾

ところで清朝は康熙十二年に中國南部において始まった三藩の亂に對して、東北地方の兵力を割いて應援に行かせたので、北方に對する防備は自然と手薄になった。ちょうどそのとき康熙十四年三月にチャハル部のブルニ親王が清に反亂を企て、東北地方に迫る氣配を見せた。⁽⁶⁷⁾吉林副都統アンジュフは、残った老弱の兵などに急ぎ訓練を施してこれに備えたとい⁽⁶⁸⁾う。他方寧古塔においても、城内の住民をみな必兒汀(鏡泊湖)まで避難させた。⁽⁶⁹⁾ブルニの反亂を通して、バハイは東北における八旗兵力の再編成を行う必要を痛感したにちがいない。早速ジャヌカから新滿洲佐領を寧古塔に徙すことを奏請する。こうして大規模な新滿洲佐領の移住を斷行することになった。それは翌十五年から始まって、三十年代まで續く。そ

して彼らの足跡は寧古塔、吉林から遠く盛京や北京、さらには黒龍江地方にまで及んでいる。そこで最初に十五年の移住開始から説明しよう。

前述したように、新滿洲の多くが佐領の編成以前からすでに三姓と寧古塔に移っていたが、そのうち三姓周邊にいた新滿洲佐領が、まず寧古塔に移動を始めた。これが大移動の發端となる。『陳學士文集』薩布素傳によると、同年に東部新滿洲二千戸餘りを寧古塔に徙したという。その中には「王欽部」の二百戸も含まれていたが、王欽部はウエンケン川附近の住民と考えられるので、⁽⁷⁰⁾薩布素傳に言う東部新滿洲は、三姓附近にいた新滿洲佐領のことである。確かに表3の(4)ジャヌカと(6)エルジュの兩佐領は、十五年に三姓方面から寧古塔に移住しているし、⁽⁷¹⁾また彼らに従屬していた(4)キシヤオと(4)デドウシェンらもいっしょに寧古塔に入り、その際に獨自の佐領を形成することになった。⁽⁷²⁾寧古塔佐領の(1)ケルデと(3)フハトゥ、さらに吉林佐領の(8)ゲオルシェンらもこのときともに寧古塔に移動したと考えられる。それでは彼らの移住は、十五年のいつに行われたのであろうか。『吉林通志』卷八十七安珠瑚傳所引安將軍行狀には、寧古塔將軍バハイは新滿洲佐領を寧古塔に徙すに先だち、⁽⁷³⁾クヤラ佐領の吉林移駐を直接に指揮した吉林副都統アンジュフの經驗を買って、彼を再び寧古塔副都統に調したことを述べる。同書卷六十二職官志によれば、アンジュフが寧古塔副都統に再任されたのは、十五年三月のことである。新滿洲佐領が寧古塔に移ったのは、この前後とみられる。

ところが寧古塔に入った新滿洲佐領の大半は、すぐに吉林に移動してしまふ。三姓から寧古塔へと向かった移動を第一波とすれば、これは第二波とすることができるとする。その時期については、將軍バハイが吉林に移駐した十五年春と見るのが一般的であるが、それを記す史料はない。かえって『八旗通志初集』卷二十七兵制志には、吉林において康熙十六年に苦^ヤ雅拉兵六百名、新滿洲兵一千二百二十一名を増員したとあり、『欽定盛京通志』(乾隆元年序)卷十九職官志にも、吉林で十六年に新滿洲佐領と同驍騎校を各二十六名ずつ増額したとし、新滿洲たちが吉林に移動したのは實は十六年であったことを推測させる。ここで表3の新滿洲佐領を見てみると、十五年に三姓方面から寧古塔に移ったジャヌカとエルジュなど

は、その後また吉林へと移動している。その際これらの佐領が寧古塔に到着したあと、ただちに吉林に向け出發したとは想像しにくい。むしろしばらく寧古塔に滞在して十分に準備を整えてから、吉林に移動したと考えるのが自然である。従つて十五年末から十六年初めにかけて吉林に移つたとするのが妥當であらう。このときには三姓方面から移動してきた新滿洲佐領に、もともと寧古塔にいた新滿洲佐領が加わつて、一齊に移つたのであらう。表3の5の例で言えば、寧古塔駐防佐領の四つを除く全佐領がそうである。

『陳學士文集』薩布素傳によると、十六年にはまた諸羅、西喇心、つまり撓力河とその支流七星河流域の新滿洲三百戸を寧古塔に徙したという。表3の(2)テオチュエらは、佐領編成後に撓力河附近から寧古塔に移住しており、それらの一部と考えられる。

吉林に入つた新滿洲佐領の幾つかは、落ち着くいとまもなくさらに盛京方面に向かった。大體康熙十七年末から十八年初めにかけての出來事である。表3の(12)から(14)までの三佐領と表5の五佐領が、それに該當する。表5の(4)布克頼はワダン村の出身であつて、ジャヌカと並ぶ新滿洲内の有力者であつたが、十七年十一月には奉天副都統の地位に就いた。彼の一族は義州に土着している。(75) 表3の(12)ソルドン、(13)ヤチュハ、(14)トロングの三佐領は、それぞれ松花江下流域のレフ村、ウエケン(ウエンケン)川、アオリミ・スス村から、途中おそらく寧古塔、吉林を経て盛京に到着した。(76) 彼らは盛京城外に土塼をめぐらした草ぶきの家屋を支給され、そこに定住することになったという。(77) さらに表5の(1)都鈕、(2)烏淩額、(3)挪那らもかつては木倫(穆稜河)地方、三姓東の舒勒赫村と白石村にそれぞれ居住していたが、最終的には錦州にまで移動した。(78) 西爾虎村出身の(5)拉西達らは、義州に定着している。(79) ちなみに新滿洲佐領の盛京移駐を指揮したのは、寧古塔副都統から盛京將軍に昇進したアンジフであつた。

ところで吉林から盛京に移駐する際に、新滿洲の中にはそれに抵抗するものも現れた。ジャヌカも始めは反對していたが、最後には命令に屈服する。(80) これに對してバニオカンらはあくまで拒否して吉林に留まつた。このときに表3の(13)バニ

オカン佐領の驍騎校ヤチュハは一族とともに率先して盛京に移住したので、清はヤチュハを半箇佐領に昇進させ、バニオカンを半箇佐領に降格させた。康熙二十三年にはふたつの半箇佐領を併せて、ヤチュハをその佐領に任じている。⁽⁸¹⁾

盛京まで移動した新滿洲佐領のうち、⁽⁸²⁾ (a) ジャヌカとキシヤオ、⁽⁸³⁾ (b) エルジュの三佐領は、康熙十八年（一六七九）にさらに北京にまで進駐している。二十一年には⁽⁸⁴⁾ アルンガからも禁旅八旗に加わった。第一段階における新滿洲佐領の移動は、北京に至って終息した。

新滿洲佐領の編成と移駐に功績を立てた將軍バハイは、康熙二十二年六月に失脚してしまいが、二十年代末には寧古塔と吉林に進駐した新滿洲佐領に、再度新しい展開があった。移動の第二段階の始まりである。清は二十二年に寧古塔副都統（同年黑龍江將軍に昇格）サブスラに命じて黑龍江（愛琿）に進駐させ、ロシアからアムール川上流域を奪還することをほかった。⁽⁸⁴⁾ そしてアルバジンの激戦を経て二十八年にはロシアとの間にネルチンスク條約を締結し、アムール川流域を確保することに成功した。翌二十九年には早速、寧古塔と吉林からそれぞれ四佐領二百名、二十一佐領八百名の合計二十五佐領一千名を黑龍江に移駐させる。將軍サブスは二十九年に墨爾根、三十八年には齊齊哈爾にと轉々と駐在地を変えたが、それにともない黑龍江に入った兵丁の半數八佐領五百名もいっしょに移駐させた。⁽⁸⁵⁾ サブスとともに黑龍江地方に移った八旗兵も、そのほとんどは新滿洲とクヤラであった。たとえば表3の⁽⁸⁶⁾ (a) チマオらはダバコ・スス村にいたトホロ姓であったが、康熙十三年に新滿洲佐領に編成され、そして二十九年には寧古塔から黑龍江へ移住する。黑龍江將軍サブスが墨爾根に移駐したときには、チマオの佐領からも半數の兵丁を出してサブスに同行させた。⁽⁸⁶⁾ それから『璦琿縣志』（民國九年序）卷八武事志によれば、黑龍江に駐防した世管佐領九は、いずれもが莫爾哲勒、托闊羅（爾）、吳（武）扎拉等フルハ系の姓を稱しており、新滿洲佐領であることは明白である。また『黑龍江志稿』卷四十三職官志は、齊齊哈爾の世管佐領五は新滿洲佐領であるといい、彼らは十三年に佐領に編成されたあと、二十九年に寧古塔から移駐したと記す。

愛輝と齊齊哈爾周邊の村落には、今日でも新滿洲佐領とクヤラ佐領の子孫が生活しているところがある。『璦琿縣志』

卷九人物志においては、愛輝附近の百十五屯（鎮）に居住する住民の姓と戸数の統計が掲載されるが、滿洲族の中には新滿洲系の托閼羅、吳扎拉、何葉、莫爾哲勒、巴雅拉の各姓とともに、クヤラに屬す葛哲勒、恆奇勒等の姓が含まれている。そのうちの一村、大五家子村に住む滿洲族は、古老の話によれば、寧古塔から移住してきたのであり、以前には寧安地方の滿洲族となお交流があったという⁽⁸⁷⁾。大五家子村の吳（ウジャラ）姓などは、おそらく康熙二十九年に寧古塔から移住した新滿洲の子孫であろう。

むすびにかえて

康熙九年と十三年を境にして、アムール川中流水系の住民の多くは邊民組織を離れて旗籍に入り、東北の各地に移動していった。中流域の住民の中にはなおも邊民組織に留まったものがいたが、彼らも新滿洲佐領とクヤラ佐領が移住したあとを追って、上流をめざした。特に康熙二十年代に入ると、中流域沿岸の邊民は上流の松花江下流方面に移動を始める。四姓のうちゲイケレ姓のコリハラは、康熙二十六年（一六八七）にデシン村を捨てて三姓近傍のファルトゥン村に移った。⁽⁸⁸⁾

フシハリ、ヌイエレ、シュルムの残る三姓も、この前後に三姓附近に移住したと考えられる。これらの四姓は、康熙五十年に八旗に編入され、三姓駐防佐領を形成する。他方九年にクヤラ佐領が編成されたあとも、一部のクヤラは依然として邊民組織にあったが、五十三年に彼らは琿春において駐防佐領に編成された。さらに雍正十年（一七三三）には烏蘇里江地方に居住した七姓が、三姓佐領に組織される。彼らがこうしてことごとく八旗に編入されたことにより、アムール川中流水系に形成された邊民組織は、事實上消滅した。彼らは元來獨自な文化や方言を保有していたが、これ以後いわゆる舊滿洲の社會との接觸、交流が始まり、それを通して滿洲族の文化や方言に異質な特徴をもたらしることになった。

これに對して使大部の十姓は、移動することなく故郷に留まり續けた。『三姓副都統衙門檔案』を見ると、乾隆十五年（一七五〇）定額の邊民組織中にこれらの十姓が存在する。Hushara（〈Hushari〉副使哈喇）、Bildakiri（畢兒達齊里）、

Heikeri (黑古格勒)・Ujala (吳甲喇)・Jaksuru (加克素鹿)・Homian (何面)・Coig'or (緯各樂)・Jolhoro (趙見果樂)・Tumelir (涂墨拉勒)・G'akila (嘎即喇)⁽⁸⁹⁾である。それによると、十姓は大體、烏蘇里江口からキジ湖までのアムール川下流沿岸の村落に住んでいた。たとえばビルダキリ姓の場合、最も上流にある村落はアニュイ川口附近のドリ村で、最も下流の村はキジ湖西岸にあるボイダ村である。それに對してフスハラ姓の村落は、アニュイ川口より上流のアムール川下流沿岸に集中する。これら十姓の居住地域は、十八世紀半ばから二十世紀まで基本的にはほとんど變化がなかった。現在では彼らはみな、ナナイ(赫哲)⁽⁹⁰⁾族を構成している。要するに十七世紀後半以降、アムール川中流水系の邊民組織が解體していく中で、邊民として残るは使大部十姓などアムール川下流域の少數民族だけとなった。そして乾隆十五年に清が定額化により邊民の現状を固定化したあとは、彼らはその内部において獨自の民族を形成する道をたどったのである。

註

- (1) 拙稿「天命年間の世職制度について」(『東洋史研究』第四十二卷第四號、一九八四年)第一章、「ヌルハチ(清・太祖)の徙民政策」(『東洋學報』第六十七卷第三・四號、一九八六年)、「清朝邊民制度の成立」(『史林』第七十卷第四號、一九八七年)参照。
- (2) この史料については、楠木賢道氏がすでに紹介されている。同「清代譜牒檔案内閣について」(『清史研究』第三號、一九八七年)参照。
- (3) たとえば李興盛『邊塞詩人吳兆騫』(哈爾濱、一九八六年)、張玉興『清代東北流人詩選注』(瀋陽、一九八八年)等。
- (4) 邊民とは戸籍上の概念であって、民籍にも旗籍にも入らない。
- (5) E. G. Ravenstein, *The Russians on the Amur*, London, 1861, pp. 20-21. 吉田金一『ロシアの東方進出とネルチンスク條約』(東京、一九八四年)六〇、六七頁参照。
- (6) 『清實錄』順治九年七月丁亥、同順治十年五月甲戌の條。
- (7) 清軍とロシア人との間の戰闘については、Ravenstein, *op. cit.*, pp. 28-33. 稻葉忠吉「朝鮮孝宗朝に於ける兩次の滿洲出兵に就いて」上、下(『青丘學叢』第十五、十六號、一九三四年)、吉田氏前掲書七〇―七八頁などを参照。

- (8) 『Русско-китайские отношения В XVII веке, том 1, Москва, 1969, стр. 213. 吉田氏前掲書七四頁参照。』
- (9) 『行中記事(北征録)』は、朴泰根『國譯北征日記』(ソウル、一九八〇年)に収録される。寺内威太郎氏の書評を参照されたい(『東洋學報』第六十四卷第三・四號、一九八三年)。
- (10) 『大清會典』(康熙)卷七十四給賜、『清代中俄關係檔案史料選編』第一編(北京、一九八一年)第一號檔案「郎丘等題使狗地方進貢貂皮本」(順治十年三月六日)。
- (11) 『八旗通志初集』卷百六十七沙爾虎達傳、『清實錄』順治十六年正月甲辰の條。
- (12) F. A. Golder, *Russian Expansion on the Pacific, 1641—1860*, Cleveland, 1914, p. 55.
- (13) 李氏前掲書附錄吳兆騫年譜參照。
- (14) 『清實錄』順治十六年三月辛丑、同順治十七年七月丁丑の條、それから『平定羅剎方略』卷一。
- (15) 『秋笈集』卷二送阿佐領奉使黑斤註
老羌屢侵掠黑斤、非牙哈諸種、寧古歲出大師教之。康熙三年五月、大將軍巴公乘大雪襲破之於烏龍江、自是邊患稍息。『陳學士文集』卷十薩布素傳にも同様の記事がある。黑喇蘇密の位置について、高文鳳氏はアムグン川口附近と推定するが、不詳。同「中俄黑喇蘇密之戰」(『黑龍江大學學報』一九七九年第一期)。
- (16) 吳兆騫『歸來草堂尺牘』。また、『寧古塔紀略』。
- (17) 拙稿「清朝邊民制度の成立」二〇、二二頁參照。
- (18) 拙稿「清朝邊民制度の成立」第一章參照。
- (19) 寺内威太郎『慶源開市と琿春』(『東方學』第七十輯、一九八五年)二、三參照。
- (20) 『樺川縣志』卷五殖民志赫哲
該屯(敖其)族葛順祥、……據稱、初由烏蘇里江口紅土埃、一名德心邊此者、十三世矣。
シュレンクの地圖を見ると、アヌイ川口附近に Daisso という地名があるが、これをデシン村とすると少し下流に偏りすぎている。L. von Schrenck, *Reisen und Forschungen im Amurlande in den Jahren 1854—56*, (St. Petersburg, 1858—81).
- (21) 『清代中俄關係檔案史料譯編』第一編、第一號檔案。コリハについては、増井寛也「新滿洲ニル編成前後の東海フルガ部」(『立命館文學』第四九六—四九八號、一九八六年)一五〇頁參照。
- (22) 『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三九三冊(檔案序號)
二(項目編號)、三姓正紅旗新滿洲佐領ゴムビ承襲世管佐領執照(假稱)(以下同じ)。
- (23) ヌイェル姓とシュムル姓は奇訥林、フシハリ姓は錫祿林に居住したという。『吉林通志』卷六十五職官志。
- (24) 『清代中俄關係檔案史料選編』第一編、第一號檔案。
一例をあげれば、『寧古塔紀略』には
黑斤人、留髮梳髻、耳垂大環四五對、鼻穿小銀環、……とある。
- (26) 本稿九四、九五頁參照。

- (27) 『八旗滿洲氏族通譜』卷二十一那木都魯氏序。
- (28) Б. О. Долгих, *Родовой и племенной состав народов Сибири в XVII веке*, Москва, 1960, стр. 594, таблица 200, Намгорский がいれにあたる。
- (29) 『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三九八冊七、吉林鑲藍旗新滿洲ニカン承襲世管佐領執照。オー・ホンク村の位置は、現在のところ明らかにできない。
- (30) 『吉林依蘭縣志』（民國九年）職官門旗員額。
- (31) 註(15)を参照。
- (32) 張玉書『外國記』俄羅斯部落
康熙八年秋、復來寇。廷議乘江凍時、彼不能返、可襲擊之。朝廷以路遠勞民而止、……。
- (33) 『清代中俄關係檔案史料選編』第一編、第二十一號檔案「莫洛洪等題請強固寧古塔等處邊圍本」（康熙八年七月二十三日）
再寧古塔以外、黑嶺^{ハクシユ}以內、皆朝廷供^貢貂百姓所居之地、而羅叉常爲侵犯、其寧古塔亦應酌量添兵、……。
- (34) 『清代譜牒檔案』第三十八卷、世襲三九二冊一六、吉林鑲白旗クヤラ佐領アスハ承襲輪管佐領執照。
- (35) 『清實錄』康熙七年七月庚申。同康熙四年十月甲戌の條。
- (36) 『清代譜牒檔案』第三十八卷、世襲三八七冊一九、吉林正黃旗クヤラ佐領センボー承襲世管佐領執照。清朝の地圖を見ると、琿春の東にボホリ川がある。ボホリ村はその流域にあった村とみられる。
- (37) 『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三九八冊七、吉林鑲藍旗クヤラ佐領ジュシムボー承襲世管佐領執照。
- (38) 註(34)を参照。
- (39) 『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三九三冊二、吉林正紅旗クヤラ佐領エルデニ承襲世管佐領執照。
- (40) 『李朝實錄』（顯宗改修）顯宗六年五月丙午の條
咸鏡監司閔鼎重狀啓、本道會寧以北五鎮、近以越邊胡人、往來頻數、人心洶懼、外村居住之人入保城內。似聞弓知介種類本在雪海島中、清人遷三百戶於厚春、又揀其材力者移于寧古塔。因諸胡陵踏、憤怒逃走、諸胡爲捕此輩、往來頻數云。
- (41) 註(34)を参照。『吉林外記』卷三建置沿革は、吉林に移駐したクヤラ佐領を十二とする。
- (42) 『皇朝文獻通考』卷百八十二兵考。
- (43) 『吉林他塔喇氏家譜』移駐篇第六旅居記（金啓琮『滿族的歷史與生活』哈爾濱、一九八一年、所收）。
- (44) 註(34)を参照。
- (45) 『清實錄』康熙十年十月辛巳、及び壬辰の條。
- (46) 李書、劉景憲「三家子陶氏家族史料」（『滿語研究』一九八六年第二期）参照。
- (47) 『清代譜牒檔案』第三十八卷、世襲三九二冊一六、盛京鑲白旗新滿洲佐領ウリムボー承襲世管佐領執照。新滿洲佐領の數を四十六とする世管佐領執照もある。同じく寧古塔鑲白旗新滿洲佐領ジャルサイ承襲世管佐領執照。
- (48) この『盛京正黃旗新滿洲佐領アシトゥ承襲世管佐領執照』については、神田信夫「東洋文庫所藏滿洲文文書の二三につ

いて」(『東洋文庫書報』第十號、一九七八年) 参照。

- (49) 『清代中俄關係檔案史料選編』第一編、第四號檔案「郎丘等題補放枯兒凱貢貂各屯頭目本」(順治十年三月六日)。

- (50) 『八旗滿洲氏族通譜』卷五十二 墨爾哲勒氏希爾關傳。同卷四十九 托活洛氏奇穆納傳、『八旗通志初集』卷二百二 杜紐傳、『八旗滿洲氏族通譜』卷五十三 赫宜氏烏齡額傳。

- (51) 『康熙起居注』康熙十三年十一月己丑の條。

- (52) 『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三九三冊二、吉林正紅旗新滿洲佐領ハンドウ承襲世管佐領執照。

- (53) 『清代譜牒檔案』第三十八卷、世襲三八七冊一九、吉林正黃旗新滿洲佐領セルトゥ承襲世管佐領執照。同第三十九卷、世襲三九三冊二、寧古塔正紅旗新滿洲佐領ユキテ承襲世管佐領執照。

- (54) 註(52)を参照。

- (55) 一例をあげると、『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三八九冊一、吉林正白旗新滿洲佐領ドゥワディ承襲世管佐領執照。

- (56) こうした事實に關しては、増井氏もすでに指摘している。

- 同氏前掲論文一四〇頁参照。

- (57) 註(53)、ユキテの世管佐領執照を参照。アミダ村はまだ特定できない。

- (58) 『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三九八冊七、寧古塔鑲藍旗新滿洲佐領ルンボー承襲世管佐領執照。

- (59) 註(47)、ジャルサイの世管佐領執照を参照。

- (60) 『清代譜牒檔案』第四十卷、世職一三四一、北京鑲黃旗

新滿洲佐領オトンゴ承襲世管佐領執照。

- (61) 註(29)を参照。

- (62) 註(52)を参照。

- (63) 『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三九三冊二、吉林正紅旗クヤラ佐領トゥンバイ承襲世管佐領執照。同第三十八卷、世襲三九二冊一六、吉林鑲白旗新滿洲佐領フアダ承襲世管佐領執照。同第三十九卷、世襲三九六冊五、吉林正藍旗新滿洲佐領フアボー承襲世管佐領執照。またナオナについては註(53)、セルトゥの世管佐領執照を参照。

- (64) 註(55)を参照。

- (65) 寧古塔城は康熙五年に、それまでの舊城(現海林縣舊街)から覺羅村の地(現寧安縣)に新城を築いて遷ったので、この逸話はそれ以前の出來事と考えられる。従つて烏棘たちが歸順したのも、康熙五年より前ということになる。『歸來草堂尺牘』。

- (66) 『清代譜牒檔案』第三十九卷、世襲三九六冊五、寧古塔正藍旗新滿洲佐領トゥンダリ承襲世管佐領執照。オミン地方の位置は、不明。

- (67) 森川哲雄「チャハルのブルニ親王の亂をめぐって」(『東洋學報』第六十四卷第一・二號、一九八三年) 参照。

- (68) 『吉林通志』卷八十七 安珠瑚傳所引安將軍行狀 施調吉林副都統。察哈爾部落布里尼坂、謀竊烏拉。時兵皆南征、烏拉存兵、老弱及餘丁僅六百餘人、公亟爲訓練、創設木城木廠、嚴爲防守。賊至錫爾坦嶺、聞有備遁去。

- (69) 『秋笈集』跋一(吳振臣撰)

後遇插哈喇之亂、都統唐公、限三日內、合城滿漢俱遷至必兒汀、避難。

- (70) 周藤吉之『清代滿洲土地政策の研究』(東京、一九四四年) 三一八頁参照。

- (71) 『清代譜牒檔案』第四十卷、世職一三四冊二、北京鑲黃旗新滿洲佐領サイントウ承襲世管佐領執照。また註(60)参照。

- (72) キンシャオは註(71)を、またデドウシエンは註(47)、ジャルサイの世管佐領執照を参照。

- (73) 『吉林通志』卷八十七安珠瑚傳所引安將軍行狀

初東海有墨爾哲氏、累世輸貢。至是其長扎努喀、布克託等願率衆內遷、將軍巴海奏稱、辦理招撫事宜、非安某不可、有旨、復調寧古塔副都統。於是招來東海部落四千七百餘丁、安置寧古塔附近、設佐領四十、扎努喀、布克託及諸族屬任之、分轄其衆、號新滿洲。

- (74) たとえばブクタオらは一足先に十七年に到着しているが、ジャスカらは遅れて十八年に移ってきた。『宮中檔康熙朝奏摺』第八輯(臺北、一九七七年)、第八號檔案「諭安珠瑚處置遷來盛京人戶事宜」(康熙十八年正月九日)。

- (75) 『八旗滿洲氏族通譜』卷三十兀札喇氏布克紹傳、『清實錄』康熙十七年十一月辛亥の條。

- (76) ソルドンは註(48)、ヤチュハは註(47)、ウリムボアの世管佐領執照を参照。トロンゴについては『清代譜牒檔案』第三十八卷、世襲三九二冊一六、盛京鑲白旗新滿洲佐領ケチオ承襲世管佐領執照。レフ村は『行中記事(北征錄)』において、松花江口附近の村として記録される列伐であらう。アオリ

ミ・スス村は、松花江下流のオーリミ村である。

- (77) 王一元『遼左見聞錄』

奉天八關廂、多有達子營、義氣滿洲(Ice Manju)所居也。從塞外投誠隨旗披甲、建官房安插之、每一家給草房三楹、土垣繚之、藥櫛櫛比、如村落云。

- (78) 都鈕、烏凌額については『八旗滿洲氏族通譜』卷三十八巴雅拉氏胡克珍傳、同卷五十三赫宜氏烏齡額、それから挪那に關しては註(48)を参照。『錦縣志』卷十六人物志はこれらの人物の出身地を、それぞれ西拉科、寧古塔、長白山とするが、後二者については據ることはできない。

- (79) 『義縣志』中卷人物志上。

- (80) 註(74)を参照。

- (81) 註(47)、ウリムボアの世管佐領執照を参照。

- (82) 註(60)と(71)を参照。

- (83) 『清代譜牒檔案』第四十八卷、世職四〇六冊七七、北京正白旗新滿洲佐領ドゥムバイ承襲世管佐領執照。

- (84) 『皇朝文獻通考』卷百八十二兵考。

- (85) 註(84)を参照。

- (86) 『清代譜牒檔案』第三十八卷、世襲三九二冊一六、黑龍江鑲白旗新滿洲佐領カンダイ承襲世管佐領執照。ダバコ・スス村は、オーキヤ村の西に位置していたとみられる。『樺川縣志』卷二交通志に達巴戸とみえる。

- (87) 『滿族社會歷史調查』(瀋陽、一九八五年)二二二、三頁参照。

- (88) 『清代譜牒檔案』第三十八卷、世襲三八七冊一九、三姓正

黃旗新滿洲佐領ドゥルヒョー承襲世管佐領執照。

- (89) 遼寧省檔案館『三姓檔』（民族事務專題史料）第七〇號檔
案（乾隆五十六年十一月五日）。遼寧省檔案館外『三姓副都
統衙門滿文檔案譯編』（瀋陽、一九八四年）第七〇號檔案は、
その中國語譯である。

- (90) 拙稿『清朝邊民制度の成立』第四章參照。

system through Guiji 詭寄 (commendation of land to the Shenchin). This led to a stricter policing of the Baolan regulations in the Yongzheng 雍正 period, but this was not successful and finally even the regulation was withdrawn in the Qianlong 乾隆 period. Behind the Government's decision lay the realization that the system of Baolan by the Shenchin was deeply-rooted in society, and that it developed and spread in spite of attempts at strict enforcement of the regulation.

Seen from the tax collection point of view, the government of the Qing dynasty was not able to eliminate local control by the Shenchin; on the contrary, effective government was only possible by coming to terms with the realities of local society. In this respect, it affords an illustration of the realities of governance by a "despotic dynasty".

THE IMMIGRATIONS OF THE KŪYALA AND NEW MANCHU ZUOLING 佐領 IN THE FIRST HALF OF THE KANGXI 康熙 REIGN

MATSUURA Shigeru

From the beginning of the seventeenth century Nurhaci, Taizu 太祖 of the Qing dynasty, and his successors extended their domain to the middle and lower reaches of the Amur River and organized most of the minorities in those regions into a group called frontier people 邊民.

When the Russians entered the Amur region, about the middle of that century, the Qing government conscripted the frontier people of the middle Amur region to form the Eight Banners garrison 八旗 in order to reinforce the northern military strength. First, in the ninth year of the Kangxi, the Qing government organized the Kūyala tribe living along the course of the Ussuri River and the southern part of the Maritime Province into the fourteen Kūyala zuoling and stationed them at Ningguta 寧古塔. In the following year they were sent to Jirin 吉林. Second, in the thirteenth year it organized the Hūrha tribe, which lived mainly along the lower reaches of the Sungari River, into forty New Manchu 新

滿洲 zuoling, from which twelve zuoling were separated in the fifteenth year. Since the so-called Three Feudatories 三藩 and Burni (Prince of the Chakhar Mongols) revolts occurred just at that time, it became necessary to reorganize the military units and transfer these new zuoling. In the fifteenth year of the Kangxi, the Qing government stationed the New Manchu zuoling in Ningguta and in the next year transferred most of them to Jirin. During the seventeenth and eighteenth year, three zuoling from Jirin were transferred to the Mukden district. At the end of the eighteenth year these zuoling were moved from Mukden to Peking. Moreover, in the twenty-ninth year, the year following the conclusion of the Treaty of Nerchinsk between China and Russia, the Qing government sent at once the Eight Banners garrison, which included many Kūyala and New Manchu zuoling to the Heilongjiang 黑龍江 district.

Later, the frontier people remaining along the middle Amur region were organized into the Ilan-Hala 三姓 and Hunchun 琿春 banner garrisons, thereby causing the organization of frontier people in the middle Amur region to disappear, and only the frontier people in the lower Amur region remained.

SOME PLACE-NAMES IN XIONGNU 匈奴

SATO Hisashi

People insist variously that the Xiongnu race belongs to the Turkish racial family or the Mongolian racial family or the Aryan racial family etc. However, I believe that they belong to the Mongolian racial family.

Recorded in the *Shiji* 史記 and the *Hanshu* 漢書 are some place-names that were used in the Qing period and which also appear on contemporary maps. Interpreted in Mongolian, these names are as follows:

1. Tian-yan-shan 賓顏山 = Ataya yin dabaṛa. Zhao-xin-cheng 趙信城 = near Ataya ṛoul or Ulanbatur.
2. Gu-ju-shui 姑莧水 = Tūi yin ṛoul.